

「仁丹町名表示板」と「まち歩き」

——京都仁丹樂會の活動から——

井 出 文 紀

はじめに

- I 「仁丹町名表示板」とは
- II 仁丹町名表示板の魅力と京都仁丹樂會
- III まち歩きからみえるもの——交通学会エクスカージョンからおわりに

はじめに

京都市内を何気なく歩いていると、町家の角、路地の片隅にある地蔵尊の脇、老舗和菓子店や仏具店の店先などに、白塗りに青枠の瑛瑛引きの細長い看板に黒色の筆字で京都独特の住所が書かれ、「仁丹」のロゴがついた「町名表示板」を見つけることができる。この町名表示板は、設置から既に100年近くが経過しているにもかかわらず、いまだに鮮やかな色合いを失うことなく現役の道案内役を務め続けており、京都市内を巡る観光客や住人に正確な住所を教えてくれる。さらに、設置当時の京都の街並みとその後の都市開発の様子を現在に伝えてくれる生き証人として、また、戦前期に日本有数の広告主として名を馳せた森下仁丹の広告戦略を検討する上での貴重な資料として、極めて重要な存在である。しかしながら、その価値はほとんど顧みられることなく、再開発や改築、心無い人間による盗難などによって、年々その枚数を減らしている。本稿では、筆者が参加する「京都仁丹樂會」の活動と、これまで検討してきた町名表示板の設置経緯、設置状況を簡単に紹介するとともに、退職された青木先生にも同行いただいた、仁丹の町名表示板を題材とした「まち歩き」活動についても触れ、まち歩きの意義と、町名表示板が設置された場所にあり続けることの重要性を指摘したい。

I 「仁丹町名表示板」とは

総合薬メーカーの森下仁丹は、1900（明治33）年に発売された梅毒新剤の「毒滅」、

1 「町名看板」「町名札」など様々な呼称があるものの、本稿では京都仁丹樂會が使用している「町名表示板」の呼称を用いる。

その5年後に発売された懐中薬の「仁丹」が劇的にヒットし、日本の売薬業界を牽引したのみならず、その積極的な広告戦略から、「日本の売薬王」「日本の広告王」などと呼称される存在となった。創業者の森下博（1869-1943）は、一頁・二頁ものの大型新聞広告に代表されるような新聞広告を全国各紙に相次いで掲載したのみならず、野立広告、電柱広告、広告塔、博覧会での広告等、屋外広告を積極的に繰り広げた。その広告費の巨額さ、「毒滅」のロゴとなった「ビスマルク」の大きな横顔、「仁丹」のロゴとなったカイゼル髭に大礼服姿の外交官のイラストが、その商品名とともにメディアや街頭などの大衆の目に触れやすい場のいたるところに登場したことから、当時の社会全体に極めて大きな影響を与える存在であった。さらに森下は、事業の基本方針に「原料の精選を生命とし、優良品の製造供給 進みては、外貨の獲得を実現し、広告に依る薫化益世を使命とする（下線筆者²）」を掲げ、広告を通じた社会貢献の実践、いわゆる「広告益世」も重視した（第1表）。

森下仁丹の社史をみると、

第1表 森下博、仁丹広告関連年表（明治から大正時代）

1869（明治2）	森下博、広島県沼隈郡鞆町（現 福山市）に誕生
1893（明治26）	2月 森下南陽堂を創業
1900（明治33）	2月 梅毒新剤「毒滅」発売
1905（明治38）	2月 懐中薬「仁丹」（赤大粒）発売、森下博薬房と改称
1906（明治39）	発売2年目にして売上高家庭薬第1位に
1907（明治40）	輸出部新設、中国販路開拓着手 東京倉庫開設 大阪駅前イルミネーション建設
1908（明治41）	中国全土の郵便代弁処4000ヶ所に仁丹委託販売を委嘱 （のち、1912年 ムンバイ、1915年 ジャワにも支店設置へ） 東京に三色イルミネーションの広告塔建設
1909（明治42）	東京市内で電柱広告設置開始→警察より塗替命令（明治44年 広告物取締法）
1912（大正元）	この頃、京都で木製町名表示板設置開始
1916（大正5）	2月 広告革新の宣言（金言広告開始） 5月 東京・大阪で金言入り電柱広告
1918（大正7）	東京市とその周辺地域への町名表示板設置開始
1920（大正9）	広告費100万円を突破（宣伝部長谷本弘：広告費のピークは大正12年ごろ）
1921（大正10）	仁丹輸出高、わが国売薬輸出の6割を占める
1922（大正11）	森下博営業所と改称 2月 「仁丹の体温計」「仁丹ハミガキ」発売 上野に大広告塔建設
大正末～昭和初	大津市に木製町名表示板設置 京都市に瑠璃製町名表示板設置

出所 井出（2018）

2 森下仁丹（1974）、p.32。

町名の表示がないため、来訪者や郵便配達人が家を捜すのに苦勞しているという当時の人々の悩みに応え、1910(明治43年)からは、大礼服マークの入った町名看板を次々に掲げ始めた。当初、大阪、東京、京都、名古屋といった都市からスタートした町名看板はやがて、日本全国津々浦々にまで広がり、今日でも戦災に焼け残った街角では、昔ながらの仁丹町名看板を見ることができる³。

とあるように、森下の広告戦略と広告益世の理念を体現したものが、全国各地に設置されたとされる「町名表示板」である。ただし、戦後になって大阪、奈良、大津に設置された町名表示板の一部、戦前から京都並びに伏見で設置された町名表示板こそ現存しているものが知られていたが、その詳細にかかわる資料は存在しておらず、他都市の状況ならびに設置時期などに関してはほとんど検討がされていなかった。そこで井出(2017, 2018)では、森下が毒滅、仁丹両製品の販売開始以来急増させた広告費とその内容を概観した上で、京都をはじめとするいくつかの都市で戦前に設置が開始された仁丹のロゴ入りの「町名表示板」設置に焦点を当て、その設置状況を検証する試みを行った。京都では、日出新聞への読者投稿欄の記述から、木製町名表示板の設置開始時期がおおよそ1912(大正元)年であること、珙瑯製に関しては1925(大正14)年に撮影されたとされる古写真にその存在が確認でき、1929(昭和4)年に分区して誕生した東山区、中京区などにおいても、分区以前の上京区、下京区の表記がみられることから、それまでの間に設置されたと思われること⁴、加えて、東京では1918(大正7)年から木製の町名表示板が9万枚以上設置されていたとする森下博薬房東京倉庫作成の資料が存在すること、大津でも大正末には木製の町名表示板が設置されており、現存するものもあることを明らかにした(井出2018)。

また、当時の背景として、全国各地で急増した屋外広告の存在と、それに対する景観面からの懸念や批判の声の高まりを受けて、政府による広告物の取締強化がなされ、東京市内での仁丹の電柱広告や京都市内の大型看板が規制対象になったこと、取締の細則では「公益性」を有するものが例外とされたことを確認したうえで、新聞広告などで災害に対する義捐活動などを行っていた森下にとって、屋外広告における「公益性」追求の最初の取組が京都市における町名表示板の設置であったといえるのではないかと指摘した(井出2017)。

その後さらに発見された資料で、大津市内には大正初期から中期に既に木製の町名表

3 森下仁丹百周年記念誌編纂委員会(編)(1995), p.36。

4 仁丹のロゴは何度もそのフォント、周辺の図案に微細な変更が繰り返されている。筆字フォントの仁丹、周辺の「外交官」とされる人物の衣服のデザインが細かく描写されているのは創売から大正末までで、珙瑯製の看板上端もしくは下端にある仁丹のロゴは、木製が設置された大正初期のものとは異なっている。このロゴが使用されたのは、新聞広告では大正15年4月から、製品では昭和2年からである。設置時期が特定できる新聞記事、写真画像ははまだ発見されておらず、森下仁丹社内にも当時の設置状況を記録した資料が存在していないことから、正確な設置年は今後の検討課題である。

示板が設置された可能性があることが判明した。第1図は大津市で1891年(明治24年)に発生したロシア帝国ニコライ皇太子の暗殺未遂事件である「大津事件」の現場を大正期に撮影したと思われる古写真で、大津市歴史博物館の木津勝副館長がオークションで入手されたものであるが、そこに映り込んでいる町名表示板のロゴの形状ならびに写っている店舗の開設時期、道路幅の状況から、この写真が1915(大正4)年から大正末の間に撮影されたものであり、これまで確認されてきた大津市内の木製の町名表示板とロゴの形状が異なっていることから、京都市内の木製町名表示板とほぼ同じ時期に設置された可能性がある。

また、戦前期、舞鶴市内でも町名表示板が設置された可能性があることも、舞鶴の街並みを撮影した絵葉書(第2図)から確認することができた。画面左奥には、現存する「秋末履物店」、右奥に「太陽堂薬局」が写っていることから、舞鶴市の大門通と三条通の交差点を北から撮影したものであり、その南東角の和洋雑貨商の2階には、仁丹のロゴとともに「大門通三條(下四文字不明)」と書かれた町名表示板が設置されていることがわかる。ただし、舞鶴市の古写真で町名表示板が確認できているのは現時点でこの一枚のみであり、詳細な分析は今後の課題である。

第1図 下小唐崎町の町名表示板が映り込む古写真とその拡大



出所 大津歴史博物館 木津勝氏所蔵

- 5 前述のとおり、このロゴは京都市で最初に木製の町名表示板が設置されたところと同じものであり、大津市で大正末頃以降に設置されたと思われる木製町名表示板のロゴは、京都市内の瑠璃製のものに近い形状である。
- 6 写真中ほどにある「初音屋音楽店」は現存しており、創業大正4年であることから、この写真は1915年以降の撮影である。また、このあたり一帯で「軒切り」とよばれる道路拡幅が大正末頃に行われていることから、それ以前の撮影であることがわかる。

第2図 絵葉書「(新舞鶴名勝)三條通」とその拡大



出所 京都仁丹樂會 下嶋一浩氏所蔵






以上の状況をまとめたものが第2表、第3表である。

これらから、すでに戦前から東京、京都、滋賀には町名表示板が設置されていたこと、初期には木製のものが、大正末から昭和以降では珐瑯製のものが設置されたことが分かる。さらに、東京市に報告された詳細な設置データから、その枚数が約9万枚にもなっていること、後述するように京都市内でも古写真に町名表示板が同一交差点近辺に複数設置されていること、その後に設置された珐瑯製の町名表示板でも、交差点の建物すべての角に取り付けられていた例や、町名が変わる地点には必ずと言ってよいほど複数枚の設置がされていた例があることから、市内各所の辻々ならびに町界ごとに相当な密度で町名表示板が設置されたことが想像される。

とはいえ、東京市内では、その後の戦災や度重なる地名、自治体名の変更、街並みの近代化などに伴い、現存する町名表示板は確認できていない。また、それ以外の自治体においても、戦後設置されたと思われる珐瑯製の町名表示板ですら、区名、町名の変更に伴い廃棄が進み、現存するものはごくわずかである。他方、京都市内の町名表示板は、京都市内での戦時中の被害が極めて限定的なものにとどまった⁷こと、何よりも、京都独特の住所表記が設置当時からほとんど変わっておらず、区名の変更を除けばいまだにその住所町名表示が有効であることから、道案内の役を果たし続けている。したがって、百年近くにわたり同じ町名表示板がその機能を保ったまま設置され続けているという京都市内の仁丹町名表示板は、極めて稀有なものであるといつてよい。ただし京都市

7 京都市内の第二次大戦中の空襲被害については伊藤忠夫『京都空襲-8888 フライト-米軍資料からみた記録』京都新聞出版センター、2021年に詳しい。

第2表 京都市, 旧伏見市, 大阪市, 奈良市, 大津市の珓瑯製町名表示板


	京都市	伏見市	大阪市	奈良市	大津市
サイズ (cm)	91×15	60×12	76×12	60×12	76×15
商標の位置	下, 上	下	下	下	上
色	青, 赤でロゴ 住所は黒(手書きか)	青, 赤でロゴ 住所も青(珓瑯)	黒, 赤でロゴ 住所は黒(珓瑯)	黒, 赤でロゴ 住所は黒(珓瑯)	黒, 赤でロゴ 住所は黒(珓瑯)
商品名, コピー	なし	なし	仁丹歯磨	仁丹歯磨	仁丹歯磨 急救護身薬 日常保健薬 執務勉強に 旅行運動に 日常保健に 訪問接客に
市区名	区名(横書)	伏見市	区名(縦書)	なし	なし
現存枚数(注) (2016.9.4現在)	664	10	21	13	17
					
設置時期	大正末~昭和初	昭和4~6年	昭和26年ごろか	戦後か	戦後か

注 各地の現存枚数はさらに減少中であり, 京都市内では600枚程度である。

出所 京都仁丹樂會, 井出(2017, 2018)

内においても, バブル期の都市開発, 老朽化した町家の建て直し, 民泊ブームによる再開発などによって, 町名表示板が設置されていた町家が解体されたこと, 心無いコレクターや転売目的による盗難, 売却などが相次いだことからその枚数は年々減少の途にあり, 30年前に千数百枚が現存していた町名表示板は, 2016年時点で664枚, 現在ではさらに減少して600枚弱に留まる。

第3表 京都市, 東京市, 大津市の木製町名表示板

	京都市	東京市	大津市
色	白字に赤枠 住所は黒	白字 住所は黒 区名は赤か	初期:不明 後期:白字に青緑枠 住所は黒
記述内容	通り, 町名 一部区名も デザインに違いあり	区名, 町名, 丁目, 番地	初期(右):町名のみ 旧ロゴ 後期(左, 中央):町名 下部に「火の用心」新ロゴ
現存	11枚(2016年時点)	確認できず	後期で1枚現存を確認
例			
設置時期	大正元年頃	大正7年～ 約9万枚設置	右(初期)大正初か 左・中央(後期)大正末か

注 舞鶴市は1枚が確認されたのみで詳細不明のため表に加えていない
出所 井出(2018)に加筆。

II 仁丹町名表示板の魅力と京都仁丹樂會

2011年, 消えゆく京都の仁丹町名表示板の保存, ならびに謎の多い設置背景の研究を目的として, 市内の仁丹町名表示板を撮影, 記録していた市民有志が集まり, 「京都仁丹樂會」が結成された。代表を務める立花滋氏は, 京都市内で学校教員をしていた当時から, 市内で消えゆく町名表示板の存在に心を痛め, その撮影を30年来行ってきた。ほかにも, いわゆる仁丹町名表示板愛好家である10名ほどが, それぞれ, 仕事の合間や退職後の余暇を活かして, 市内をくまなく回りながら, 現存する町名表示板のデータベース化, 古写真や文献資料の収集などを行ってきた。その価値を広く市内外の方に知って頂くための広報活動として, これまでの活動成果をブログで発信するとともに, 京都ひとまち交流館や京都駅地下通路でのパネル展の実施や, 啓発を目的としたパンフレ

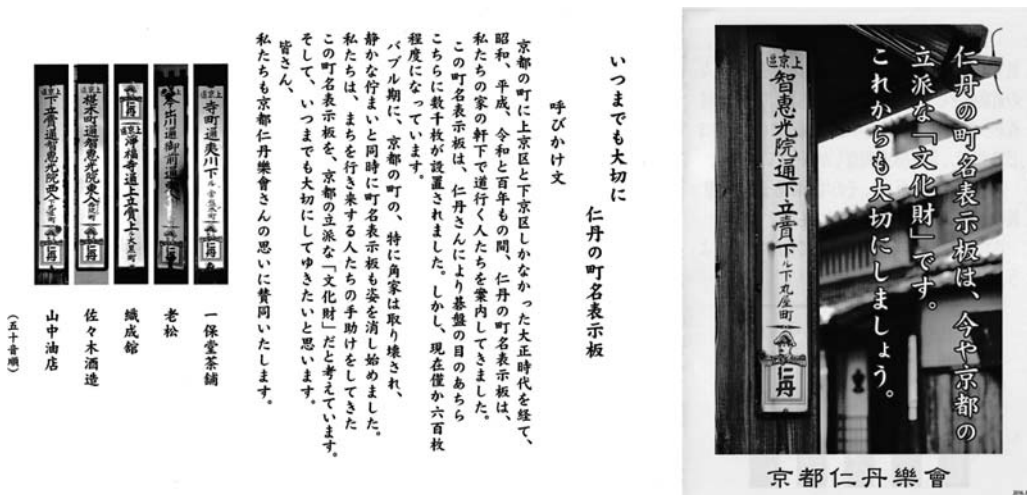
8 2014年12月23日から28日まで, 「まちかどの文化財 仁丹町名表示板-その魅力と謎に迫る!」と題した研究成果展を, 京都市のひと・まち交流館で行い, 翌15年3月末にはJR京都駅烏丸公共地下道のストリートギャラリーで再展示したほか, 2015年11月から12月にかけて京都市景観・まちづくりセンター, 京町家等継承ネットの主催, 上京区役所地域力推進室の協力により開催された「創造の

ットの配布(第3図)などを行ってきた。また、まち歩き企画「まいまい京都」からの要請で、2012年以降まち歩きのガイド役を務め、これまで、四条烏丸から東本願寺門前までのコース、京都市役所前から東山三条付近までのコース、北野天満宮から上七軒を経て千本北大路付近までのコース、六条通沿いをめぐるコースなどでガイド役を務めた(第4表)ほか、森下仁丹の互助会企画、後述する日本交通学会のエクスカージョンなどでも、まち歩きを通じて仁丹町名表示板の歴史的価値とその魅力を伝える活動を行ってきた。筆者はもともと設立時のメンバーとインターネットを通じて交流があり、2012年のまち歩き企画に参加したのを契機に会員となった。

京都仁丹樂會が考える仁丹町名表示板の魅力は、以下の5点である。

第1に、設置後100年近くが経過するにもかかわらず劣化の度合いが極めて限定的で、美しさが保たれていることである。大正末から昭和初期ごろにかけて設置されたとされる市内の珐瑯製の町名表示板は、錆や退色に強く、現在でも判読が容易である。それに対して戦後になってから設置された他社のロゴ入りの町名表示板は、ブリキ地にペンキ塗りで書かれたものであるため、錆や退色により判読不能になっているものが多¹⁰い。

第3図 京都仁丹樂會作成のパンフレット



出所 京都仁丹樂會

- 10 「まち・上京」プロジェクトの一環として、11月7日から8日の2日間、元西陣小学校校舎内でパネル展のうち上京に関連したものを再展示するとともに、代表の立花氏が「仁丹町名表示板が見つめてきた、まち・上京の魅力」と題した講演を行った。
- 9 「まいまい京都」は「京都の住民がガイドする京都のミニツアー」をコンセプトに、2011年から以倉敬之氏により運営されているミニツアーであり、おおよそ参加費は2500円から、2-3時間で1.5キロから3キロ程度の距離をじっくり歩きながら、特定分野やコンセプトの下で、それに詳しい関係者がその「愛」を語りながら15名から20名程度の参加者を案内するものである。詳細はまいまい京都 WEB サイト参照。
- 10 市内では、フジダイマル、NEC、ナショナル、アリナミン、八瀬かまぼろ温泉などのロゴ入りのも

第4表 京都仁丹樂會が関係したまいまい京都まち歩き企画

開催日	タイトル	備考
2012/10/14	「京都仁丹樂會といく、下京の仁丹町名表示板～仁丹好きには宝のような辻子から、木製・珙瑯35の仁丹を辿る～」	
2013/3/31	「京都仁丹樂會といく、寺町・川東の仁丹町名表示板～仁丹愛が救った！感動ストーリーから平成復活仁丹、木製仁丹まで～」	
2013/6/2	「京都仁丹樂會といく、上七軒・柏野の仁丹町名表示板～仁丹は語る！モダン京都の都市改造から、埋蔵木製仁丹まで～」	
2013/9/7	「京都仁丹樂會といく、下京の仁丹町名表示板～80歳を越えてなお美しい…謎だらけ、京都の名物看板～」	
2013/11/3	「京都仁丹樂會といく、上七軒・柏野の仁丹町名表示板～仁丹は語る！モダン京都の都市改造から、埋蔵木製仁丹まで～」	
2014/11/1	「京都仁丹樂會と、下京40の仁丹町名表示板めぐり～謎だらけ名物看板！木製仁丹、箱入り仁丹、仁丹密集エリアへ～」	
2015/5/10	「謎だらけ名物看板を探して、上京の路地・辻子めぐり～京都仁丹樂會といく！木製仁丹、復活仁丹、奇跡の発見仁丹まで～」	
2015/5/30	「謎だらけ京都の名物看板！仁丹で読み解く、六条通の不思議～戦前戦後の古地図で、京都仁丹樂會と昭和レトロな京都をめぐる～」	
2016/6/12	「謎だらけ！京都の名物看板で読み解く、六条通の不思議～京都仁丹樂會といく、戦前戦後の古地図でたどる裏道小みち～」	
2018/5/4 2018/9/1 2019/5/18 2020/10/17	「謎だらけ京都の名物看板！仁丹マニアと読み解く中京の不思議～仁丹が分かれば、京都のまちが楽しくなる☆レアな木製仁丹から復活仁丹まで～」	※下嶋氏個人ガイド
2019/11/2 2021/3/7	「上京 VS 中京・左京 VS 東山！区境の謎を、名物看板で解き明かせ～京都三大事業！幻の“東山線通”！？仁丹が分かれば、京都のまちが楽しくなる～」	※下嶋氏個人ガイド
2020/10/26	「京都仁丹樂會と徹底解剖！まち歩きではできなかった仁丹完全版～謎だらけ、京都の名物看板！激レア仁丹から“伏見市”、大阪、鞆の浦まで～」	オンラインイベント

出所 まいまい京都 WEB サイトより抜粋

第2に、そのデザインの秀逸さである。白地に青の縁取りがされた珙瑯引きの上に筆字で住所が記載されたデザインは、広告的機能を兼ねているとはいえ、商品名やキャッチコピーが書かれておらず、極めてシンプルな構図となっている。ゆえに町家、商店、モダン建築それぞれに自然に溶け込み、京都の歴史的景観の一部となっている。町名表示板の存在は、2013（平成25）年度の京都景観賞の屋外広告物部門で特別表彰を受けるに至っている。

、のが種々確認されている。例えば、和菓子店亀屋良長本店前に「中京区醒ヶ井通四条上ル藤西町」の町名表示板がケース入りで2枚展示されているが、珙瑯引きで作成された仁丹の町名表示板は鮮明なままであるのに対して、戦後に亀屋良長により設置されたブリキ製のものは色落ちが激しく判読が困難である。

11 屋外広告物部門の特別賞として、京都の景観にふさわしい珙瑯看板を設置した森下仁丹と、その保全に努めた京都仁丹樂會とが表彰を受けた。

第3に、京都市内の複雑な住所に対して極めて正確に表記、設置がされていることである。京都の旧市内は基本的に東西南北に交差する二本の通りの名を組み合わせた独特の住所表記で知られており、交差点であっても、自分が現在立っている通りの名を先に、交差する通りの名を後に記述した上で、その交差点からの位置関係（北＝上ル 南＝下ル 東西＝東入、西入）を組み合わせることで位置関係が極めて詳細に表示される。仁丹による町名表示板はこの公称のルールを守って正確に記載され、その表記通りの場所に対して正確に設置されている。例えば交差点の角の部分に設置された町名表示板の場合、交差点が面する通りと交差点からの位置関係を踏まえて異なる表記がされたものが複数枚設置されているケースがあるが（第4図）、その表記と方角は極めて詳細かつ正確である。大正初めに木製の町名表示板が設置されたころには、町名は大きく、通り名は小さく書かれていたが、珙瑯製では通り名を大きく、町名は小さく書かれたものに変更されている。当時の日出新聞の投書欄「落とし文」では、

仁丹商標付の町名札は成程一挙両得的の好趣向だが何等の実用上功の無い町名其物を大書して何通何町何入の指示名を却つて小さく割書にしたのは字配の都合からかは知らぬが何だか間が抜けてゐるよ（穴さが土）¹²

第4図 交差点角に設置された町名表示板例とその拡大



注 諏訪町通側北西角：「諏訪町通楊梅上ル 横諏訪町」、楊梅通側南西角：「楊梅通諏訪町 西入 横諏訪町」と、面している通りの名を先に、交差する通りの名を後にし、その交差点からの方向を北（上ル）、南（下ル）、東西（東入、西入）で表示している。
出所 京都仁丹樂會

12 『日出新聞』大正元年11月4日。

との記載もあり、利用者や地元からの声に応じてそのデザインを変更させていったものと推測される。

第4に、それら正確な表記ゆえに、1929（昭和4）年に上京・下京の2区しかなかった京都市の行政区が変更され中京区、左京区、東山区が発生した経緯、1931（昭和6）年の市域拡大と右京区、伏見区の誕生¹³、京都三大事業¹⁴（第二琵琶湖疎水、上水道整備、道路各地区および市電敷設）に伴う京都市内の都市整備によって生じた道路の変更の影響、戦時中の建物疎開と道路の拡幅や付け替え、戦後の都市計画など、京都で生じた近代化のプロセスとそれに伴う街並みの変化を物語る生き証人たり得る点である。当時の住所に極めて正確に設置されたまま残されている町名表示板は、設置当時にその通りや区がどのような呼称であったのか、街並みがどのようなものであったのかを読み解く一つの手がかりとなり得るのである。

第5に、町名表示板が設置された家屋が解体されたり建て替えられる際に、近隣住民によって隣戸に町名表示板が移設されたり、建て替えまで保存されていた後再設置される例、複製品を作成して設置した上で現物が町内会で保存される例、町内の地藏尊の祠の中や組運動会の表彰状などと一緒に町の中心に設置されている例など、老舗店舗の看板さながらに、「町内の看板」として大切に扱われているものもあり、長らく街の風景に溶け込んできた表示板を大切にしようという生活者・町内への愛着が感じられる点である。

企業が設置した町名表示板がここまで街の風景と同化し、また歴史的価値を有する例は、仁丹の町名表示板において他に存在せず、極めて貴重な存在であるといつてよいのではないだろうか。ただしその価値は、100年近い時を超えて、いまだに変わらない住所表記を道行く人に正確に伝える案内役を果たし続けているからこそ認められるものであり、設置された場所を離れて、博物館の展示物や売買目的の骨董物として扱われることではない。地元の人に愛され、街行く人が住所を確認する際に、見上げる風景の中に現れるからこそ、その価値は最大限発揮されるものである。近年、一部のアンティークマニアによるレトロな瑠璃看板の人気が高まったことを受け、町名表示板を住人や町内の許可なく勝手に取り外し、ネットオークションサイトなどで売買しようとする者が現れ、メディアなどでも取り上げられ問題となった¹⁵。また、町家の老朽化や所有者の変更に伴う土地の売買、ゲストハウスや民泊の急増に伴うリフォームの急増などに伴い、家屋の解体や改装が市内各地で行われており、その際に設置されていた町名表示板が所在不明となるケースも相次いでいる。何とか設置枚数の減少を食い止め、末永く地元の

13 京都市（1941）『京都市制史（上巻）』参照。

14 京都市の三大事業については京都市（1913-1914）『京都市三大事業誌』、伊藤之雄（2006）『近代京都の改造 都市経営の起源 1850-1918年』ミネルヴァ書房も参照。

15 たとえば「ちょっと盗まんといて 京名物 町名版被害続々」『毎日新聞』2015年2月4日など。

人々、観光で訪れる人々に愛される存在となって欲しい、というのが京都仁丹樂會メンバーの切なる思いである。

Ⅲ まち歩きからみえるもの——交通学会エクスカージョンから

2014年10月18、19日の2日間にわたり、同志社大学で「都市観光と交通」をテーマに日本交通学会の第73回研究報告会が開催された¹⁶。その初日、同学会の関係者の方々にまち歩きを体験していただく「エクスカージョン」が企画され、京都仁丹樂會にガイドの依頼があったことから、筆者が青木先生をはじめとする交通学会の先生方をご案内することになった。以下、当日の様相を紹介しながら、仁丹の町名表示板を切り口にしたまち歩きの実例を示したい。

集合場所となったのは、同志社大学のメインキャンパスがある烏丸今出川交差点である。まずはそこで、京都独特の住所表記、烏丸今出川近辺のまちづくりの変遷とそこに登場する仁丹町名表示板などについて説明した。

京都府立歴史館寄託の「石井行昌撮影写真資料」には、烏丸今出川の交差点を南側から撮影した大正初めの写真がある（第5図）。当時市電敷設に伴う烏丸通の拡幅は今出

第5図 烏丸今出川写真とその拡大

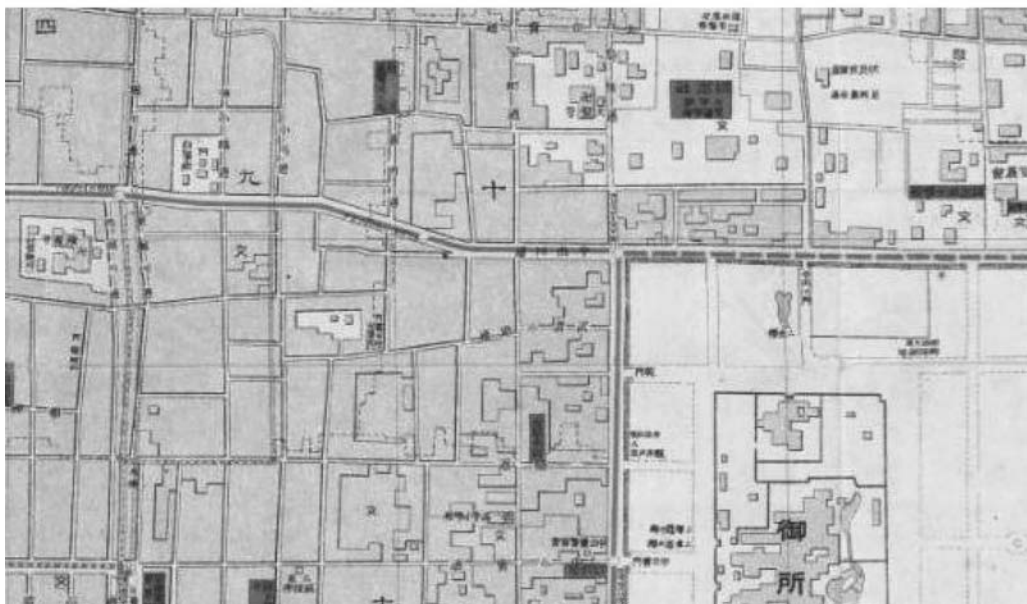


出所 石井行昌撮影写真資料《市電》(写真番号147) 京都府立京都学・歴史館寄託

16 日本交通学会研究報告会のプログラムについては、同学会 WEB サイト (<https://koutsu-gakkai.jp/houkokukai.html>) を参照。

川通までにとどまっております、市電の敷設状況から、この写真は1913(大正2)年5月26日から1917(大正6)年10月31日の間に撮影されたものであることが分かる。写真の矢印部分には、木製の仁丹町名表示板が取り付けられており、不鮮明ながらも今出

第6,7図 烏丸今出川周辺地図の変化



上 「実地踏測京都市街全図」1911(明治44)年発行

下 「京都市街全図：附著名諸会社、銀行、商店案内」1913(大正2年)発行

出所 国際日本文化研究センター (<https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/syoizou-map.html>)

第8図 堀出し町案内図にみる「旧今出川通」



筆者撮影

川町，玄武町の町名と上部の仁丹のロゴが判読できる。烏丸今出川の交差点をはさんで極めて近い距離に3枚もの表示板が設置されていることから，大正初年の時点で辻々にこれら町名表示板が設置されていた可能性を読み取ることができる。

ここから今出川通を西方向へと歩く。上京区総合庁舎を過ぎたあたりで，今出川通は北側へと斜行し，しばらくして再び東西方向に水平に伸びる通りに戻る。なぜこの部分で今出川通は斜行するのだろうか。国際日本文化研究センターが所蔵する1911（明治44）年発行の「実地踏測京都市街全図」と1913（大正2年）発行の「京都市街全図」における道路の状況を比較してみたい（第6,7図）。明治末期の今出川通は，御所の北側と同志社大学との間まで東西に直線的に伸びたあと，烏丸通を過ぎたところからその道幅が狭まり，室町通から小川通までの間はジグザグの細い道路に変わっている。小川通以西は白雲神社（地図中の白雲社）の南を通るものが今出川通である。それが，大正初期になると市電の開通とともに当該部分はジグザグの細い道路の北側に斜めに太い道路が伸びている。拡幅後も元々の細い道路は残されたものの，町内の案内図には「旧今出川通」という表示がされている（第8図）。同地に現存する珉瑯製の町名表示板には，「舊今出川通」という表記がされており，ここからも今出川通の変遷を知ることができる。ちなみに，今出川通をさらに西に向かい，北野天満宮手前の上七軒エリアを歩くと，現在の今出川通とは異なるお茶屋街沿いの道路に「今出川通」から始まる町名表示板を見ることができる。これは，現在の今出川通の拡幅工事が行われるまで，今出川通

は上七軒のお茶屋街を東西に通り返し、北野天満宮の東門に至る道路であったことを示すものであり、現在の住所表記とは微妙に異なる町名表示板の住所からは、京都の近代化の中で進められた道路の拡幅と付け替えの歴史の一端が浮かび上がるのである。

さらに堀川通を過ぎ、「慈眼庵辻子」とよばれる細い通りを案内した(第9図)。京都市内には「辻子(図子)」とよばれる非常に細い通りが数多く存在する。そのなかでも上京区には一条通以北、智恵光院通以東、烏丸通以西に辻子の集中地域があり、京都市内約100例のうち実に50例がここに集中している¹⁷。辻子には様々な歴史的由来にちなんだ名前が付けられており、たとえば狩野元信が居を構えていた地域とされるエリアには「狩野辻子」と呼ばれる辻子があり、その名残は町名の「元図子町」にもあらわれている。辻子の多くはその道幅の細さゆえに開発が遅れたこともあってか、古い町家が残されているケースも多く、結果的にそこに設置された町名表示板、とりわけ初期の木製の町名表示板が奇跡的に現存する場合もある。慈眼庵町に残されていたものは、町家の角度からか風雨への露出が少なく、極めて良い保存状態で木製の町名表示板が現存してきた稀有な例である。現在は木製の町名表示板は町内の方により大切に保管され、精巧に複製されたプラスチック製の町名表示板が掲示されている。

第9図 慈眼庵辻子の町名表示板前での説明



17 上京区役所ホームページによれば、「一条以北、智恵光院以東、烏丸以西に辻子の集中地域があり、京都市内約100例のうち実に50例がここに集中している」とのことであり、またその辻子が細かく紹介されている。上京区役所WEBサイト「上京区の特徴」(2010年12月6日)(<https://www.city.kyoto.lg.jp/kamigyoo/page/0000012338.html>:最終閲覧日2021年7月6日)。

第10図 消滅した山名町の町名表示板前での説明



その後訪れた「山名辻子」は、応仁の乱の西軍の総大将であった山名宗全邸跡の碑が残る地で、辻子の名にもなっている「山名町」の珉瑯製町名表示板が設置されていた。ところがこの町名表示板は、2011年に心無い何者かにより盗難の憂き目にあい、いまだ発見されていない（第10図）。町名表示版は、設置以来100年近くにわたり、町の案内役として、さらに設置以来変わらぬ京都独特の住所表記と、設置当時の京都の近代化の情報を今に伝える貴重な歴史的価値を有するものとして、その場所に存在してこそ意味のあるものである。参加者の方々にもその思いをお伝えしたかったというのがこの場所を案内した一つの理由であった。

その後小川通を北上し、寺ノ内通で応仁の乱の史跡として有名な「百々橋」跡、千家の不審庵、今日庵などを紹介し、一度は町家解体に伴い姿を消したものの通りを挟んで向かいの住宅に再設置された町名表示板などを紹介しつつ、同志社大学に戻るというコースで一行をご案内した。参加者の先生方からは「勉強になった」「楽しかった」「面白い企画だ。京都だからできるのかもしれない」「京都は何度か来ているが、こんな細かい通りを歩くのは初めてだ」などの会話が耳に入り、我々の会の想いを参加者の先生方に共有して頂けたとの思いを強くした。

おわりに 「仁丹」を探すまち歩きの意義

最後に、「まち歩き」が与える意義にも付言しておきたい。近年、NHKの「ブラタモリ」が人気を博しているように、特定コンセプトのもとでまちを歩きながら、その歴史や自然、まちが出来上がっていった背景を探るような取り組みが人気を博している。また、「長崎さるく」(2006～)、「大阪あそ歩」(2008～)、「まいまい京都」(2011～)といった市民ガイドによるまち歩きツアー企画も全国各地で盛んに行われるようになった。高橋愛典(2018)は、先行研究や様々な実践例をもとに、まち歩きを「まちを歩き、自分の興味・関心に沿ってまちを読み解き理解する行為」と定義している¹⁸。その上で高橋は、自身もゲストとして度々参加している「Walkin'About」というまち観察企画を紹介している。これはガイドが指定したルートガイドに付き従って歩くという通常のまち歩きとは異なり、参加者が駅の改札前などに集合した後、簡単なエリア説明を受けたのち、90分間思い思いにまちを歩いてもらい、その後再集合した喫茶店などで、それぞれの見聞や体験を相互に発表しあうというもので、2014年から、大阪ガスエネルギー・文化研究所・都市魅力研究室の企画として開始されたものである。

このまち観察企画を主宰する山納洋は、参加者に「芝居を観るように、まちを観る」という事を呼び掛けている。

まちには現在だけでなく、過去のさまざまな時代に作られた建物や区画や構造物が複層的に残されています。その背後にはさまざまな時代の作り手が、それぞれの時代に凝らした意図が存在しています。芝居を読みとくように、複数の時代にまたがった数々の意図を読みとくためには、僕らが今持っている知識だけではならず、50年前、100年前、400年前の知識を動員する必要があります。(略)“芝居を観るように、まちを観る”とは、作り手や開発者の視点を知り、まちに働く諸力を理解するとともに、受け手や生活者の視点に立ってまちのあるべき姿をとらえ直すことでもあります。いま目の前にある建物や商店や住宅や道路などを観たときに、それ自体の面白さや美しさを味わうだけではなく、その背景にあった必然や意図、それが実現したことによって生み出されたドラマに思いを巡らせるというのが、僕らがWalkin' Aboutを通じて行っている「マチよみ」の基本スタンスなのです¹⁹。

「超芸術トマソン」を提唱した赤瀬川原平らは、「路上観察学会」を誕生させ、1986年の2月および88年の4月、京都で「超芸術」「マンホール」「西洋建築」「ハリガミ」「銭湯」「狛犬」「食堂」など様々な切り口から路上観察を楽しみ、その成果を出版している。また、「考現学とはなにか」を特集した『現代思想』2019年7月号で佐藤守弘

18 高橋(2016), pp.116-118。

19 山納(2019), pp.14-20。

は、「超芸術トマソン」の観点から、路上観察における四つのモーメントをまとめている。すなわち、①とにかく「探査」する→②違和感を覚えたものに焦点を合わせると、それが一体何であるのか、なぜ違和感を覚えたのか、どのような成り立ちでできたのかを「観察」する→③それがトマソン物件であると認められたら、それを写真に撮る—すなわち「探査」する→④発見されたトマソン物件をある特定の「タイプ」に「分類」する²⁰、である。

京都仁丹樂會のメンバーは、町名表示板を「トマソン」的要素として見ているわけではないものの、仁丹のロゴがついた町名表示板になぜか魅せられ、それを探して京都市内を数十年にわたり探査し続け、各人の関心をもとに、それがどのような成り立ちで、何故この場所についているのかを考え、ひたすら写真に撮り関連資料の収集を行い、会員間のデータベースで共有するとともに、様々な分類を試みてきた。町名表示板を探してまちを歩く営みを続け、それぞれの関心領域から仁丹の町名表示板が持つ様々な謎を「楽しく発見していく會」として続けてきた活動の蓄積が、結果的にまちの歴史の変遷を追い続け、その変化の背景にあった要素を読み解くこと、町名表示板の価値を再発見することにもつながっているのである。

まち歩きを企画し、少しでも多くの市民や観光客に仁丹の町名表示板がもつ価値を伝えること自体には、一定の意義があると思われる。ただし、我々京都仁丹樂會員がガイドとなって行うまち歩きそのものは、道幅の狭い路地や辻子を歩くこと、設置されている民家の前で立ち止まることが多くなりがちであることなどから、大人数での実施は困難であり、ガイド役の人数、時間の制約からも頻度を増加させることが難しい。また、まち歩きの材料となる地図や仁丹の町名表示板の設置場所のリストを公開して欲しい、という要望も一部から寄せられたことがあるものの、近年心無い盗難案件が度々発生してしまっているために、詳細なデータの公開には慎重にならざるを得ないのが現状である。ぜひ市民の方々、観光客の方々には、たまたま見かけた仁丹町名表示板が、他にどのような場所に設置されているのかを、それぞれの視点から探索していただき、そこから100年前の京都、その後の都市の変化に伴う町名表示板を取り巻く環境変化を想像しながら、想いを巡らせていただきたい。ひいては、まちなかにひっそり設置されている瑠璃引きの看板が、実は全国でも非常に稀有な存在であり、そこで道案内役を続けることにこそ大きな価値があるのだということを理解していただきたいと切に願うものである。

京都仁丹樂會では、引き続き、京都市内に瑠璃製の仁丹町名表示板が設置された正確な時期の確定につながるような古写真、資料を探しているところである。心当たりのある方は是非筆者もしくは京都仁丹樂會ブログ宛にご連絡いただければ幸甚である。ま

20 佐藤 (2019), pp.130-132。

た、家屋の建て替えなどに伴い取り外された町名表示板が、様々な人の手を経て個人宅や店舗内などに収蔵されたままになっているものも一定数存在しており、そうした「埋蔵」町名表示板に関するデータ収集も行っている。同志社大学のサークル内にも備品として町名表示板が存在するとの未確認情報もあり、何か情報をお持ちの方がいればご一報いただきたく、この場を借りてご協力をお願い申し上げたい。

付記

青木真美先生には、同僚の高橋愛典先生経由で引き合わせて頂き、本論文中で紹介したエクスカージョンのほかにも仁丹の町名表示板をめぐるまち歩きに関する報告を都市交通研究所でさせて頂いたほか、筆者也愛飲し研究対象ともしている日本酒のイベントなどでもご一緒させて頂くなど、公私ともに大変お世話になりました。これまで賜ったご指導に心より御礼申し上げますとともに、今後のますますのご健康、ご活躍を祈念申し上げます。

参考文献, WEB サイト一覧

- 赤瀬川原平、藤森照信他路上観察学会編『京都おもしろウォッチング』新潮社、1988年。
- 井出文紀「森下仁丹の町名表示板広告と『広告益世』」近畿大学商経学会『商経学叢』64巻2号、2017年12月。
- 井出文紀「仁丹のある風景 戦前における仁丹町名表示板の設置状況をめぐって」大正イマジュリイ学会『大正イマジュリイ』No.13、2018年6月。
- 伊藤之雄『近代京都の改造 都市経営の起源 1850-1918年』ミネルヴァ書房、2006年。
- 京都市『京都市三大事業誌』各巻、1913-1914年。
- 京都市『京都市制史(上巻)』1941年。
- 佐藤弘道「トマソンの類型学 ポピュラー文化のなかの超芸術」『現代思想 特集 考現学とはなにか——今和次郎から路上観察学、そして〈暮らし〉の現代へ』2019年7月号。
- 高橋愛典「まち歩きと地域デザイン：新発見を誘うフレームワークの構築」『地域デザイン』8号(特集 地域文化と地域経営)、2016年9月。
- 田中泰彦編『写真集 京の町並み』京を語る会、1972年。
- 水谷憲司『京都・もう一つの町名史』永田書房、1995年。
- 森下仁丹史録課『回想録』、1959年。
- 森下仁丹『森下仁丹80年史』、1974年。
- 森下仁丹百周年記念誌編纂委員会(編)『仁丹から JINTAN へ 森下仁丹100周年記念誌』1995年。
- 森下博「仁丹本舗の二大店は」井関十二郎(編)『繁昌する商店』同文館、1917年。
- 森下博薬房『仁丹須知』、1921年。
- 京都日出新聞 仁丹時報 各号
- 大津市歴史博物館「大津の歴史データベース」<https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/db/index.html>
- 京都仁丹樂會ブログ <http://jintan.kyo2.jp/>
- 京都府立京都学・歴史館デジタルアーカイブ「京の記憶アーカイブ」<http://www.archives.kyoto.jp/>
- 国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>
- 国際日本文化研究センター所蔵地図データベース <https://db.nichibun.ac.jp/pc1/ja/category/syozou-map.html>
- まいまい京都 www.maimai-kyoto.jp
- 森下仁丹歴史資料館 <http://www.jintan.co.jp/special/museum/>